



～女性研究者編～



愛媛大学大学院 医学系研究科看護学専攻 教授

演 耕子先生

女性の健康を擁護する立場から、妊娠しながら女性が働き子育てをするには、周囲の理解やその環境が必要であることを伝えていますが、欲を言えばその機会にワーク・ライフ・バランスやそのための社会づくりについても考えてもらいたいという期待があります。少子化が続くなか企業

学生に向けて

女性の健康を擁護する立場から、妊娠しながら女性が働き子育てをするには、周囲の理解やその環境が必要であることを伝えていますが、欲を言えばその機会にワーク・ライフ・バランスやそのための社会づくりについても考えてもらいたいという期待があります。少子化が続くなか企業

仕事・育児以外の生活について

核家族なので実家には長期休暇を利用して行きます。親きょうだいから喜ばれ、家族の絆を感じます。日頃は主人と娘で近場でも一緒に行動し、愛媛の素晴らしい温泉でリラックスしています。買い物に行くと娘に声をかけてくれたり、幼稚園の子どもたちが声をかけられたときには癒されています。少子化とは言いますが地域とのつながりを感じます。

現在の状況について

三年前、家族と共に愛媛入りしました。臨床経験を経て大学院以来、今回のようなワーク・ライフ・バランスに関連する「女性の就業や子育て」を研究テーマに取り組んでいます。普段は看護学生に対して、昨年からは共通教育でライフスキル教育として女性の健康やセクシュアリティ等も含め幅広く教えています。最近、女性医師を取り巻く就業・育児支援への期待、助産師職への社会の期待について講演する等、医療従事者にもワーク・ライフ・バランスの要素を取り入れながら話す機会が多くなりました。

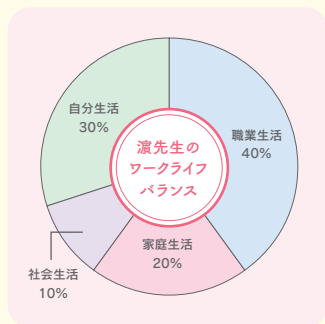
家族構成は幼稚園に入りたての娘と、家事・育児を担ってくれる主夫です。夫は私の異動のために地元で退職しました。このような恵まれた状況で私の仕事は生活の一部になっています。夜遅く帰宅しても娘の成長していく姿を見るのが飽きない楽しみでしょうか。

育児経験で変化したこと

つわりのつらさは先輩助産師が妊娠しても、教科書で教えていてもわからなかった体験でした。だからこそ無事な出産にその後の生活に感謝の気持ちが溢れました。以前は片方が働かないと育児休業は取れなかったため、夫にその間働いてもらいました。自分が仕事で夫を待たせるのは平気なのに、なぜか自分が夫の帰りを待つのは寂しかったです。育児の負担感は主婦に多いというデータに対して、なるほどと納得しました。大学教員の立場で復職はスムーズでしたが、誰もが母性看護学の教鞭をとることができないため職責は感じました。夫が



ワーク・ライフ・バランスの割合 ++++++



努力でも個人単位でもワーク・ライフ・バランスを通して、生活を振り返ったり様々な人の価値観にふれることが求められているように思います。看護学科においては男子学生が増えてきましたが、私自身は男だから女だからという見方はしていません。高学歴社会で不景気が続いており、男女問わず働く動機も多様化しています。これからの学生さんには働くまでにひとつでも自己実現をする機会が大切だと感じています。